

論文

メキシコ西部ロス・アガベス遺跡の建築プランと盛衰 —簡易測量と発掘調査からの考察—

吉田 晃章*

はじめに

本稿では、2017年2月から3月にかけて行われたメキシコ西部ハリスコ州、ロス・アルトス(Los Altos)地方における踏査と5月に行われたロス・アガベス(Los Agaves)遺跡¹の調査から得られたデータをもとに、同遺跡の建築プランの特徴を明らかにし、遺跡のおおよその年代の同定を行うこととする(地図1)。さらに同遺跡がメキシコ西部から中央高原のどのような文化伝統の影響を受けているのかを考察したい。ロス・アガベス遺跡は、中心部分が6haほどの小規模遺跡ではあるが、近傍には刻点十字紋(pecked cross)を含む多数の岩絵²が存在しており、この遺跡の祭祀センターとしての重要性が窺える。

5月の調査では、ドローンを利用し、遺跡の簡易測量を実施し、遺跡の建築プランが図化された。また、これまで踏査により、ピラミッド状基壇など複数の基壇によって構成される中央広場の中心には、わずかな隆起が確認されていた。このため発掘によって、広場中央における隆起が建造物か否かを判断し、遺跡の建築プランをさらに詳しく解明することを試みた。

また当該遺跡の位置するロス・アルトス地方は考古学的先行研究が少なく、この地方の社会・文化発展の様相は通時に明らかにされていない。このため、ロス・アガベス遺跡の建築プランや出遺物などを他の文化伝統と比較し、どの文化に属していたのかを検討し、さらに発掘のデータから遺跡の盛衰を読み解いていくこととする。ひいては、ロス・アルトス地方の社会・文化発展がどのように進展したのかを大局的に把握することが、本稿の目的である。

まずは先行研究をまとめ、これまでロス・アルトス地方に与えられていた先スペイン期の歴史的解釈を確認していく。その過程で、ロス・アルトス地方北西部で発見さ

* 東海大学文学部アメリカ文明学科



地図1 メキシコにおけるハリスコ州の位置
(INEGI mapa digital をもと作図)

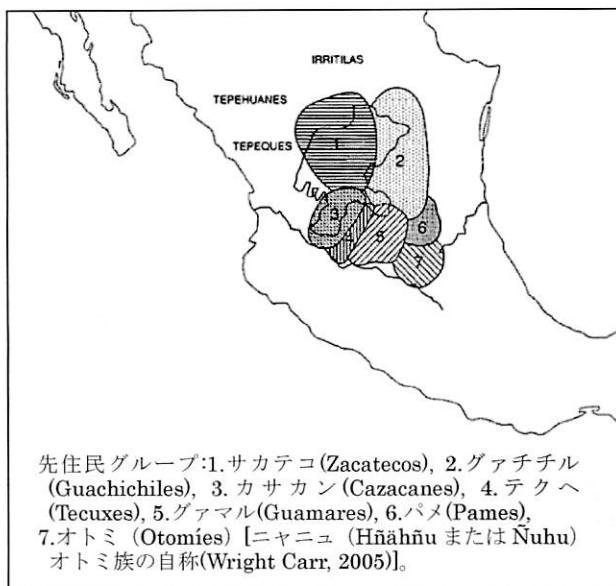
れた土偶と、同地方南西部の土偶についてその様式的特徴を見ておきたい。

1. ロス・アルトス地方における考古学的先行研究と問題の所在

1.1 ロス・アルトス地方における先行研究

先スペイン期メキシコ西部には複数の先住民文化が存在し、地域ごとに異なる発展がみられた。その理由は、西マドレ山脈、南マドレ山脈、さらにペラカルス州からコリマ州にかけて連なる火山帯が生み出す地形によって、文化的境界が形成されたためであり、それらは交易によって相互に結びつき土器や建築様式、埋葬形態など次のように一定の文化的特徴を共有していた。

これまででは、メキシコ西部といえば考古学的には、トゥンバ・デ・ティロ(*tumba de tiro*)と呼ばれる約2~22mの深さの縦穴に水平墓室のついたブーツ型の堅坑墓から出土する遺物を中心に、紀元前300年頃からおよそ600年間にわたる埋葬文化として取り上げられてきた³。メキシコ西部における堅坑墓の分布範囲は、コリマ州、ハリスコ州南部、チャパラ湖(*Lago de Chapala*)南西部・西部・北西部、そしてナジャリ州南部である⁴。またメキシコ西部地域に特有な建築プランとされ、前350年から後350/400年にかけて現れるテウチトラン伝統(*Tradición Teuchitlán*)⁵が研究者の注目を集めてきた。このテウチトラン伝統に属する遺跡は、中心の円形



地図2 スペイン征服期北西部地域の先住民
(Flores et. al. 1996, Mapa 14 より引用)

構造物を取り囲むように同心円状に長方形基壇が配され、中心のピラミッドとそれを囲む建造物群の間に環状の広場が構成される建築複合である。円形基壇を取り囲む複数の長方形建造物は、原則偶数個であり、四つないし八つの例がよく見られる⁶。この伝統はテキーラ山を中心に、北はサカテカス州、西はナジャリ州、南はハリスコ州南部まで広範囲に分布している⁷。堅坑墓の伝統はこのテウチトラン伝統とも関連し⁸、チャパラ湖以西を中心に研究が進められてきた。そのため、チャパラ湖の北東に位置するロス・アルトス地方における考古学的研究は数少ない。

スペイン人との接触時つまり 16世紀中ごろの民族分布についてフローレス(Jesús Flores Olague)らは、ロス・アルトス地方にはテクヘ人(Tecuexes)、カサカン人(Cazacanes)、グアマル人(Guamares)が居住していた可能性を図示している(地図2)⁹。征服当時、メキシコ西部では約 44 の言語が話されていたが 26 の言語はすぐに消滅したとされ、現在まで使用されているのは、コラ・ウィチヨル(cora-huichol)語、ナワトル(nahua)語、タラスコ(tarasco)語の 3 言語になっている¹⁰。これらの言語を話していた先住民がどのような人々だったのか詳しいことはわかっていない。

テクヘ人やカサカン人々が定住する以前、ロス・アルトス地方には、定住農耕民が居住し発展していた。定住農耕民はメソアメリカ中央部や南部と関係していた痕跡を持っていたにもかかわらず、彼らはアルテニヤ文化(Cultura Alteña)と呼ばれ



写真1 ヘスス・マリア村トタテリ博物館所蔵中空土偶（筆者撮影）



図1 サカテカス形式の中空土偶（アメリカ合衆国メトロポリタン美術館所蔵
Butterwick 2005, p.57, Fig.14 より引用）

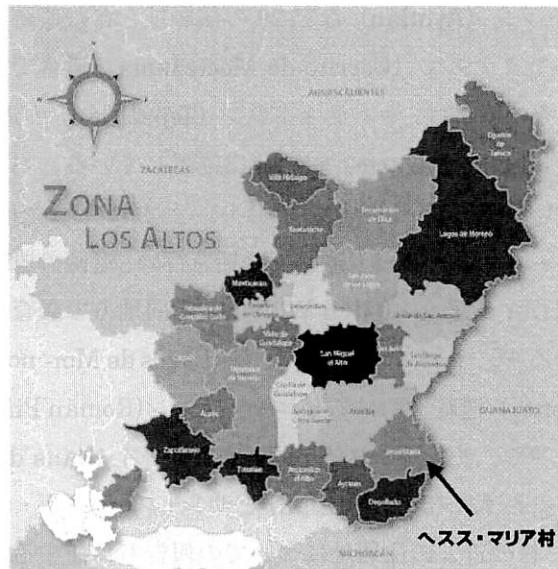
るような独自の特徴を持った文化を発展させた¹¹。アルテニヤ文化はほぼ今日ロス・アルトス・デ・ハリスコ (los Altos de Jalisco) として知られる地域とほぼ同様に広がっている¹²。この地方は、北部の狩猟採集民とメソアメリカの定住者の境界域として機能していた。アルテニヤ文化の南西には、先にも述べたようにテウチトラン伝統や堅坑墓など確立した社会が発展していたと思われる¹³。

さらにテウチトラン伝統と堅坑墓との関係は、ロス・アルトス地方においてはベル (Betty Bell) が報告しているようにセロ・エンカンタード (Cerro Encantado) 遺跡で発掘された中空土偶に見ることができる¹⁴。この土偶は頭にラッパ状の角が生えているサカテカス形式のもので、アメリカ合衆国のメトロポリタン美術館に収蔵されている土偶と同じ形式である（図1）¹⁵。この形式の中空土偶と類似するラッパ状の開口部を頭部に二つ持つ中空土偶が、ヘスス・マリア (Jesús María) 村のトラテリ (Tlatelli) 博物館にも収められている（写真1）。このことから、ロス・アルトス地方にも堅坑墓があることは確かであるが、ヘスス・マリア村付近では、その存在が学術的に明らかになっていない。

カステジョン (Blas Castellón) は1988年にアルテニヤ地方の南部の境界域といえる地域のアトニルコ・トトトラン (Atotonilco-Tototlán) 地区において、アトニルコ・エル・アルト (Atotonilco el Alto)、アランダス (Arandas)、トトトラン

(Tototlán)、アヨトラン (Ayotlán) など 29 の住居址を含む遺跡を報告した¹⁶。彼は、セリート・デ・モクテスマ (Cerrito de Moctezuma) 遺跡で行われた発掘について言及している。その遺跡は、テパティトラン (Tepatitlán) の近くのサン・ホセ・デ・バサルテ (San José de Bazarte) 村の北に位置している。ベルは、ロス・アルトス地方のリオ・ベルデ (Río Verde) 地域において、テオカルティチエ (Teocaltiche) 村の近くにあるセロ・エンカンタード遺跡で発掘を行い、近傍の遺跡についても言及している¹⁷。同様にウィリアムス (Glyn Williams) が同地方で調査をし、他の遺跡についても報告している¹⁸。ラゴス・デ・モレノ (Lagos de Moreno) にあるエル・クアレンタ (El Cuarenta) 遺跡におけるピニャ・チャン (Román Piña Chan) とタイラー (J. Taylor) の調査¹⁹や、サンchez (Sánchez) とバウス (Baus de Czitrom) らが実施した、ハロストティトラン (Jalostotitlán) とサン・ファン・デ・ロス・ラゴス (San Juan de los Lagos) 村の近くの住居址についての報告も存在する²⁰。エスペルサとロドリゲスは、ロス・アルトス地方各地の先行研究から、同地方が古典期後期（紀元後 600 年から 900 年）²¹の時期に大々的に定住集団によって居住されていたが、11 世紀までにはこの地方は、突然放棄されると解釈している。さらにロス・アルトス地方における遺跡の放棄に関して、最も受け入れやすい仮説は、環境の変化だとも述べている²²。また定住者集団が雨不足で人口を維持するのに十分な食糧を収穫できなくなり、この地方を放棄して西流し、太平洋にそそぐレルマ川の南に移動したとする。さらに、サカテカス (Zacatecas) からロス・アルトス・デ・ハリスコまで重要な遺跡は意図的に破壊されているとも述べている。さらにこの地域全般を概観し、狩猟採集民が 9 世紀頃には現れ、改めてこの地方に以前の住民と異なった生活様式をもって定住すると考え、グアチチル人やトゥスクエコ人の集団が定住者によって残された環境資源を活用し、あちらこちらで、放棄された定住地のうえを占拠し利用するが、考古学的には、決して以前のアルテニョ地方と同じほどには、グアチチル人はその数を増やさなかつたという。そして彼らは、実際のところ、盆地からアクセスしにくい場所に定住することが多かつたとされている²³。

上記のように、学術的な研究により踏査などが行われているものの、残念ながらカステジョンによる発掘などが行われてからというもの、ほとんど発掘調査は行われていない²⁴。そこで、ヘスス・マリア村付近の岩絵が多数出土する地域に位置する大型建造物を伴うロス・アガベス遺跡を調査し、紀元前後から、テクヘ人やカサカン人々が移住する以前の古典期後期にかけて、ロス・アルトス地方でどのように社会・文化発展が見られたのかを、簡易測量と遺跡発掘により実証的に探っていく。



地図3 ロス・アルトス地方 (Esparza y Rodriguez 2016 より引用)

1.2 ロス・アガベス遺跡と岩絵群

ロス・アガベス遺跡はメキシコ西部ハリスコ州のロス・アルトス地方ヘスス・マリア村に位置している（地図3）。ヘスス・マリア村はハリスコ州東部に位置する人口19,469人（2015年時点）、面積667,046 km²の小さな村である²⁵。標高2,000mを超える高原地帯で、現在では、遺跡周辺には広大な農地が広がっている。トウモロコシとテキーラの原料になるアガベ・アスル (*agave azul*) と言われるリュウゼツランが主な栽培作物である。土壌は鉄分を多く含んでおり、赤褐色をしており、その下には玄武岩が分布し典型的な火山活動により形成された、あまり地味の豊かな土壌ではなく、耕作はわずかな降雨量の違いで、収穫に影響を受けると言える。

この地域における調査は、プレサ・デ・ラ・ルス遺跡調査団のエスピルサ (Juan Rodrigo Esparza López) とエドゥアルド (Eduardo Ladrón de Guevara) らが、2012年に、ルス湖 (Presa de la Luz) とよばれる農業用のため池周辺で住民参加型の環境整備と遺跡調査を SEMARNAT (環境天然資源省) などの援助を受けて実施し、265点の岩絵もしくは岩面彫刻を確認し登録している。この調査の際、ロス・アガベス遺跡を確認している。第2期の調査は2013年に実施され、エスピルサ、ロドリゲス (Francisco Rodríguez Mota)、レティス (Mario Alfredo Rétiz García) は、

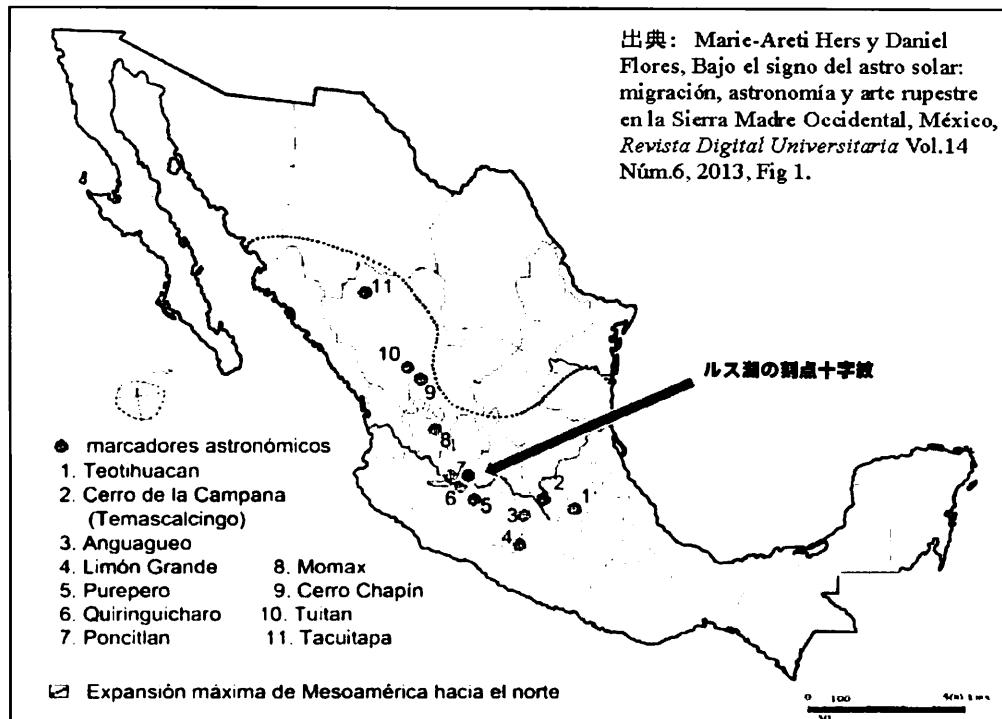


写真 2 刻点十字紋（筆者撮影）

ルス湖と流れ込む川の水源地との間の踏査を行い、さらに岩絵の登録を行っている。2015年3期の調査では、エスピルサ、ロドリゲス、レティスらによって、湖周辺域の岩絵に関する踏査が行われた²⁶。3期間の調査を通じ、少なくとも14点の刻点十字紋と名付けられた特徴的な岩絵が発見された（写真2）。その分布をみると、ロス・アガベス遺跡を中心に川沿いに点在していた（図2）。

ローカルな渦巻紋や一筆書きの図像に交じり、刻点で構成されるこの十字紋は、アヴェニラにより、天文考古学の観点から研究され、古典期前期（後250/300-600年）に栄えたテオティワカン文明とのかかわりが指摘される²⁷。アヴェニによると、テオティワカン遺跡のバイキンググループと呼ばれる太陽のピラミッド南側の区画にある刻点十字紋からコロラド山の刻点十字紋を結ぶと、5月18日のヒライアカル・サンセット（日没と同時に太陽を追いかけてスバル座（プレアデス星団）が没する天体现象）の方位と一致する。また、この日は、太陽の天頂通過の日となっており、農耕の開始の時期とも一致する。さらに、太陽ピラミッドからゴルド山の刻点十字紋を結ぶラインは、テオティワカン遺跡の中央を貫く死者の大通りの軸とほぼ平行であるとも述べている。このように刻点十字紋が天体现象と関連し、一年の特定の時期を知るための暦として機能していた可能性や、都市の建設プランと関連することがうかがえ、テオティワカンが繁栄していた古典期さらに推して言えば古典期前期のものであると考えられよう。

またヘース（Marie-Areti Hers）によれば、刻点十字紋は、メキシコ盆地から西部地域をとおり、ハリスコ州の北部サカテカス州アルタビスタ（Altavista）遺跡方面へとつづく、交易網上に位置していると考えられている（地図4）²⁸。また夏至の日



地図 4 刻点十字紋の分布ルート (Hers y Flores, 2013, Fig 1.より引用、
●と↗は筆者による)

に天頂通過する北限である、北回帰線（北緯 23 度 26 分）に位置するアルタビスタ遺跡においても刻点十字紋と遺跡が関連していることがアヴェニによって報告されている²⁹。アルタビスタから 7 km 南西に位置するチャピン山（Cerro Chapín）の祭祀センターには、二つの刻点十字紋がある（地図 4 の 9）。チャピン山の刻点十字紋からピカチョ山の刻点十字紋をみると、夏至の日の出の方角と一致する。また、同遺跡の太陽神殿から近傍のピカチョ山（Cerro Picacho）を結ぶと分点の日の出の方角が一致するとされている。

このように特異な岩絵として認識され、天文考古学の分野から研究されてきた刻点十字紋が、一地区で最も多く発見されているのはルス湖周辺をおいて他にはないと言つてよい。岩絵群はこの地域の発展を解明する重要な糸口となることは間違いない。加えて、岩絵が発見された地域は、750 km とメソアメリカでも有数の長さを誇る河川で、太平洋に注ぐレルマ川の水源の一つに当たり、儀礼上も同地域の重要性が窺える³⁰。



写真3 半球形の研磨痕（筆者撮影）　写真4 一筆書きの岩絵（筆者撮影）

刻点十字紋の他にも、用途の特定できていない半球形状の加工痕が、ルス湖に注ぐ小川沿いに多数確認されている（写真3）。直径は一様に15-20cmであり、自然にできたものではないことは、残された研磨痕から明らかできる。これはポシトス（pocitos）と呼ばれる岩面彫刻であるが、水を使用した研磨作業が営まれていた可能性があり、乾季に儀式などに使用された可能性も捨てきれない。研磨の際に水を利用しているのであれば、水の豊富な雨季の作業ということになる。10月から4月の乾季には、高地の水源地帯に水は流れていない。

また幾何学模様や人物像、渦巻き文など多数の刻線画が確認されているが、中には写真4のような一筆書きの岩絵も確認されている。渦巻き文などは、残念ながらメキシコ各地に点在しており、時期的な手掛かりとはならない。また、図像は現代のウイチョールの民芸品や毛糸細工などを想起させるが、何ら決定的なつながりは見いだせない。このあたりの岩絵は、いずれも赤褐色の岩盤に描かれており、INEGIの土壤地図（INEGI, Jesús María F13-D69）によると、玄武岩質の岩であるとされている。現在も岩絵については調査を継続しており、踏査のたびにその数を増している。エスピナルサとロドリゲスは、これまでの岩絵について図入りの詳細な報告書をINAHに提出している³¹。

これまでエスピナルサらが行った岩絵群の調査からは、メソアメリカ西部史における



図2 ルス湖周辺の刻点十字紋の分布とロス・アガベス遺跡

(Esparza y Rodríguez 2016, p.81, Fig.77 より引用 [一部改編])

る特異な位置づけを確認することができるが、先にも述べたとおり同地方での遺跡の発掘調査は、極めてまれであり、同地方の社会・文化発展のプロセスが実証的に解明されていない。また、チャパラ湖以西の西部地域と中央高原、またチャパラ湖南東部やハリスコ州北部からサカテカス州にかけての地域との交流など解明すべき点が多い。このことから、遺跡の発掘調査を通じロス・アルトス地方の社会・文化発展を明らかにするため、2016年に東海大学文学部とミチョアカン大学 (El Colegio de Michoacán) の間で学術協定を結び、2017年に岩絵群のただなかに位置するロス・アガベス遺跡 (写真5) の発掘と周辺域の踏査を行うこととした³²。また同遺跡は、



写真5 ロス・アガベス遺跡の中央ピラミッドと中央広場

西部、北部、中央高原地域の文化的境界領域に位置しており、時代に応じて、様々な文化伝統が流入する地点である。先古典期終末期（紀元前後-250/300 年）から古典期（紀元後 250/300-900 年）にかけての地域間交流とロス・アガベス遺跡の盛衰に焦点をあて、考察を試みたい。

2. ロス・アガベス遺跡における測量に関する建築プラン

2.1 簡易測量による遺跡の建築プランの調査

2016 年度にミチョアカン大学によってトータルステーションによる測量が行われたが、2017 年にはデータの補完をするため、メキシコの Arqueodrone 社のヴェネガス (Luis Venegas) 氏の協力をえてドローンによる簡易測量を行った。ドローンによる簡易測量は標識を利用して上空から写真を撮影し、結合する方法がとられた。写真によるデータ処理で、高度が自動的に計算され、測量図が描かれる。図 3 のとおり、かなりの精度で構造物の比高をとらえている³³。

ここでは、簡潔に遺跡のレイアウトを述べておきたい。ロス・アガベス遺跡は基本方位を基準に建てられており、南北軸は 1 から 2 度程度北から西に傾いている。一番高い基壇は約 15m の中央ピラミッドで、約 35×35m の範囲に底辺が広がっている。ピラミッドは、盗掘などにより、崩れており、瓦礫がマウンドの裾に広がってい

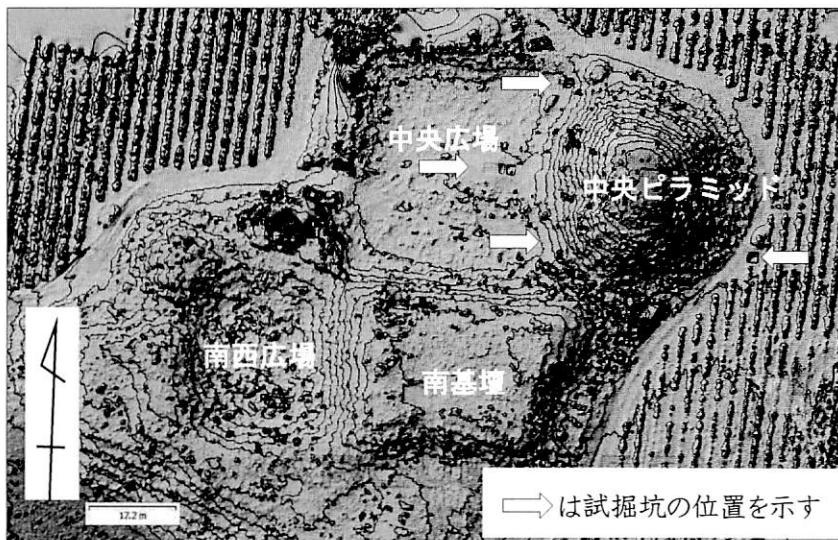


図 3 ドローンによるロス・アガベス遺跡の簡易測量図

る。このような状況から考えると、ピラミッドの基底部は 20-25m 程度ではないかと推察される。このピラミッドの西側には方形の中央広場が確認できる。一辺は約 40 × 40m で、高さ約 1.5-2m の低い構造物が取り囲んでいる。この中央広場の北東に設けられた基準点の標高は約 2206m であった。広場中央には基準点から 1m にも満たない隆起が検出された。中央ピラミッドの崩落によるものか、広場中央の祭壇と思われた。中央広場の南には、35 × 40m の長方形の南基壇が確認された。この基壇の上面はおおむね平坦であり、その高さは、中央ピラミッドの半分程度の約 7m であった。南基壇のさらに西側には、南西広場が広がっている。こちらの広場も一辺 30m の方形の広場となっている。

ロス・アガベス遺跡は全体的に建造物が方形をしており、方形の建造物ユニットが組み合わされて構成されているように見える。ドローンによる簡易測量図では、捉えられなかつたが、建造物はほかにも、南基壇から南東に 70-80m 離れたところに、6m 程度の高さを持つ二つのマウンドが確認できている。周囲には、これら二つのマウンド以外、目立った建造物が見られない点は興味深い、平坦な土地に位置しており、外敵には無防備な立地である。遺跡を取り囲むアガベ畑には、彩色土器や黒曜石が点在していたが、残念ながら踏査では構造物が確認できなかつた。

測量により遺跡には周囲を囲まれた方形の広場を中心にピラミッドや基壇が配されている様子が明瞭になった。これは先にも述べた円形ピラミッドを擁するテウチトラン伝統とは様相を異にしている。では、ロス・アガベス遺跡の建造物のレイアウトパターンはどの地域とのつながりを示すのであろうか。

2.2 西部の建築伝統

西部地域の建築伝統として知られているのが、ウェイガン(Phil C. Weigand)によって提唱されたテウチトラン伝統で、メキシコ西部地域に特有な建築プランとされ、前 350 年から後 350/400 年にかけて現れる³⁴ (図 4)。円形ピラミッドを擁するテウチトラン伝統の遺跡は、中心の円形構造物を取り囲むように同心円状に長方形基壇が配置され、中心のピラミッドとそれを囲む建造物群の間に環状の広場が構成される建築複合であることは先に述べたとおりである。伝統的な建造物のレイアウトは、長方形をした複数の建造物と、中庭と円形の階段状祭壇(ピラミッド)の三つの要素で構成されているが³⁵、ロス・アガベス遺跡で確認された建築プランは異なる

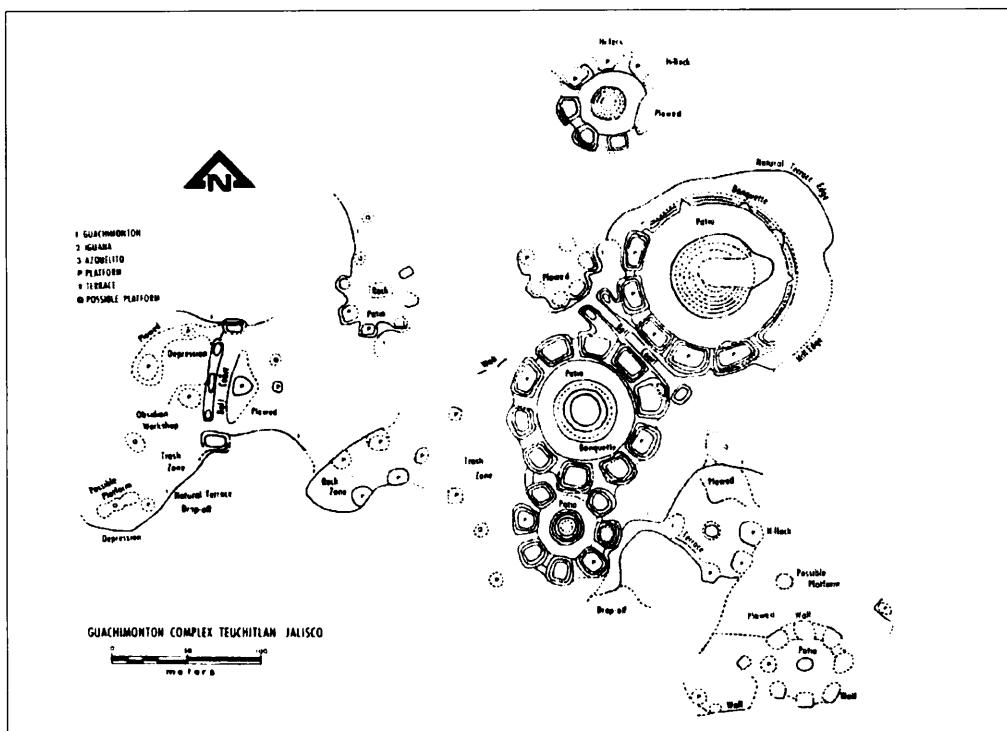


図4 ワチモントン複合 (Weigand 1985 Figure 2.11 より引用)

っている。同心円状の構造は確認できておらず、方形建造物群から構成されるプランといってよい。

建造物のレイアウトという視点から周辺の建築伝統を見直すと、ペラルタ (Peralta) 遺跡の建造物群との比較が有効であることに気づく。ペラルタ遺跡とロス・アガベス遺跡の距離は約 50km で、当時の先住民の歩行距離を考えれば、さほど遠くない距離に位置している。ペラルタ遺跡には、四方を囲まれた方形広場を中心に、ピラミッド状の基壇が広場に面している。この建築様式はバヒオ伝統 (Tracición Bajío) と呼ばれるものである。東はテオティワカン遺跡のケツアルコアトル (Quetzalcoatl) の神殿を含むシウダデラ (Ciudadela) と呼ばれる四方を建造物で囲まれた広場にもその影響がみられるとされる。ペラルタ遺跡を調査したカルデナス (Efraín Cárdenas)によれば、バヒオ伝統は紀元前後年から 900-1100 年まで続く文化伝統であり、その多くは古典期後期から後古典期前期 (900-1350 年) に集中し、図5のように形態的なパターンが示されている³⁶。この伝統は、チャパラ湖以西のグアダラハラの位置するアテマハック盆地では、エル・グリージョ (El Grillo) 遺跡にみることができるが³⁷、この特徴を示す建造物群を擁する遺跡は、ハリスコ州の

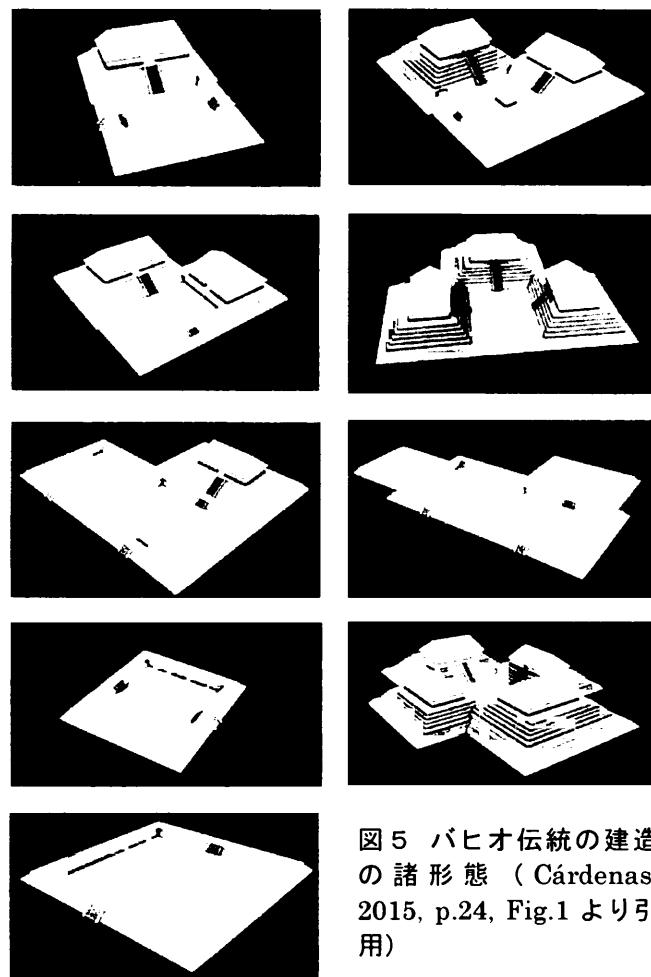


図5 バヒオ伝統の建造の諸形態 (Cárdenas, 2015, p.24, Fig.1より引用)

東に位置するグアナファト州に集中的に分布している。その代表的な遺跡には、カニャダ・デ・ラ・ビルヘン(Cañada de la Virgen)遺跡等がある(写真6)³⁸。

このように建築の伝統からは、ロス・アガベス遺跡はチャパラ湖以西のテウチトラン伝統との関連は薄く、その建築プランからはバヒオ伝統との関連が明らかとなつた。発掘データに基づいてさらに具体的にどのようなプランを持っているのか、詳細に検討していきたい。



写真6 カニャダ・デ・ラ・ビルヘン遺跡A複合と半地下式広場（筆者撮影）

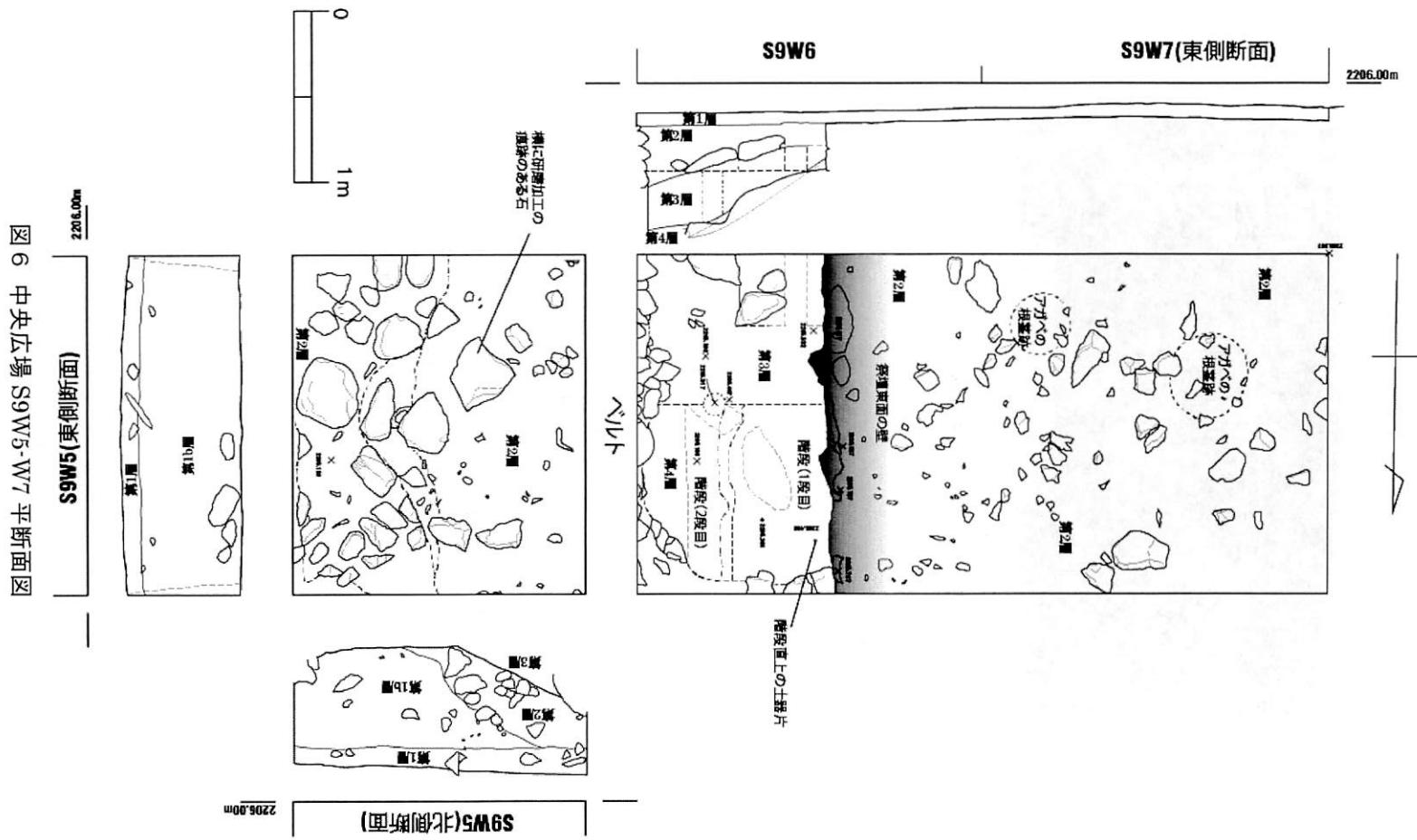
3. 発掘調査からの検証

3.1 中央広場内部の発掘区（S9W5-S9W7）

5月の発掘調査では、中央広場の隆起が方形祭壇の痕跡なのかを確認するために、 $2 \times 6\text{m}$ の発掘区を設けた（図3）³⁹。さらに広場北東端と南東端を確認するため、試掘坑を設けた。また、広場内部の堆積状況と外部の堆積状況を比較するため、中央ピラミッドの東側に試掘坑を設定した。各区画は図3中に矢印で示した。広場の角にあたる試掘坑では、残念ながら広場の端を捉えることはできず、予想以上に中央ピラミッドの瓦礫が広場に堆積していることが窺えた。

先にも述べたように、中央広場の中央には測量により、わずかながら隆起が確認できた。このため中央広場発掘の目的は、祭壇の有無を確認することである。まず隆起中央部のグリッド S9W7 を発掘した（図6、写真7）。有機物を多く含んだ第1層を取り除いたが遺物はほとんど検出されなかった。また植民地期以降の瓦礫が堆積している状況も確認され、祭壇内部を掘り進む可能性もあるため、中央ピラミッドに近い S9W6 に拡張し発掘を継続した。

褐色の土層は、15 cmほどのカンテラ（cantera）⁴⁰と呼ばれる石灰岩系の石を含んでいた。小さく砕けているが、おそらく中央ピラミッドや祭壇などに利用されていた建築材であったと思われる。この地域には玄武岩が分布しているため、遺跡の周囲にカンテラが露頭で採掘できる場所は現在のところ確認されていない。少なくとも数



キロ離れた丘から運ばれてきたと考えられる⁴¹。この第1層は広場全体を覆って、8 cmから15 cmほど堆積している。第1層を取り除いた時点で、S9W6の中央部を南北に石列が走っていることが確認された。さらにその下の第1b層は灰褐色で肌理の細かい土層であるが固くしまっておらず、小石を含んでいる。S9W5において、第1層の下から確認されたが、S9W6とS9W7には分布していない。第1層に比べ、より灰色がかっている。この土壤にはおそらく灰が含まれていると思われる。祭壇から中央ピラミッド方向へ離れるにしたがって、その厚みを最大約45 cmまで増していく。第2層はややしまっており、肌理や第1層より細かい。第1層よりも明るい褐色をしており、祭壇から崩れ落ちた大小多数の石を含んでいる。これらの石の間に第2層の土が堆積していると言ったほうが良い。層の厚みは、祭壇に近いほうが厚く、中央ピラミッド方向に向けて遠ざかるにしたがって、薄くなっていく。言い換えれば、祭壇前面に付随すると思われる階段の上に傾斜して堆積している様子がうかがえる。平均すると20 cm程の厚みがあり、S9W5とS9W6で確認された。第2層も祭壇の崩落によって形成されたとみてよい。第3層は暗褐色の土層で、発掘が困難なほど固くしまっている。この理由は、崩落してきた石の下に位置していたためだと思われた。第3層の表面は第2層と同様に東に傾斜している。第2層と比較すると石はほとんど含まれていないが、黒斑が観察された。堆積の厚みは、10 cmから20 cm程で、この層から炭化物が検出された⁴²。第3層は放棄された後、大規模な破壊の前に堆積した層である。この第3層を掘り上げると、固くしまった版築の階段と思われるやや黄色味を帯びた褐色土が出土した。このステップの直上から土器片が水平状態

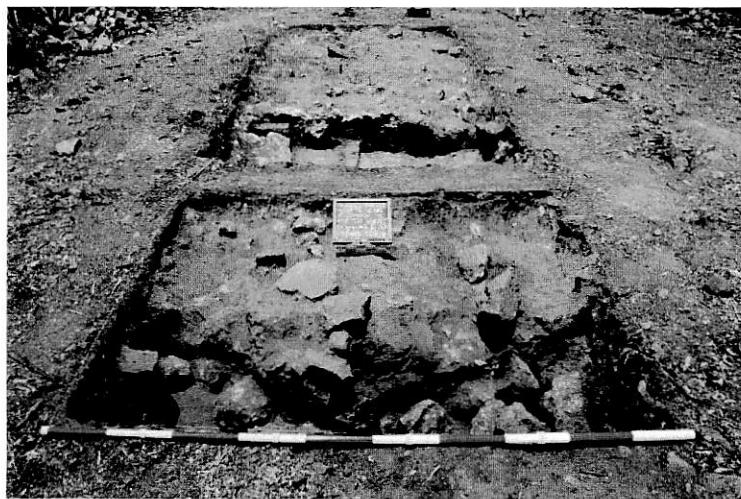


写真7 中央祭壇を含むグリッド S9W5-7（筆者撮影）

で出土している。このステップを覆うように肌理の細かい砂のような層が部分的に分布していた。この層は締まっておらず、あたかも外部から意図的に搬入し、階段に撒かれたような状況であった。この砂交じりの層は、S9W6 の階段部分にしか分布していないが、第 4 層とした。さらに掘り進むと上から 2 段目のステップも出土した。

階段部が S9W6 で検出されたため、階段のステップが床面まで何段かにわたり続いていると思われたため、S9W5 に発掘区拡張し、床面を探し掘り下げた。第 2 層の上面には部分的に研磨痕、あるいは刻線紋が残る石が出土した。岩絵群と関連する加工技術が使用されている可能性があるが、中央ピラミッドや祭壇の装飾として用いられた時期と、岩絵の制作時期とは異なるものかもしれない。

2017 年 5 月の中央広場の発掘では、S9W5 から床面やさらなるステップを確認することは時間が許さなかったが、広場の中央からは祭壇の壁とそれに付随する土製の階段部を確認できた。また階段部直上からは炭化物や土器片が出土し、一定の成果を得た。しかし想定された通り、広場内部は総じて出土遺物が少なかったが、中央ピラミッド東側の試掘坑からは、一定量の土器片が得られ、時期をある程度特定できる特徴的な土器片も確認されたので、次に述べておきたい。

3.2 広場外部の試掘坑 (Pozo Exterior No.1[PE-001])

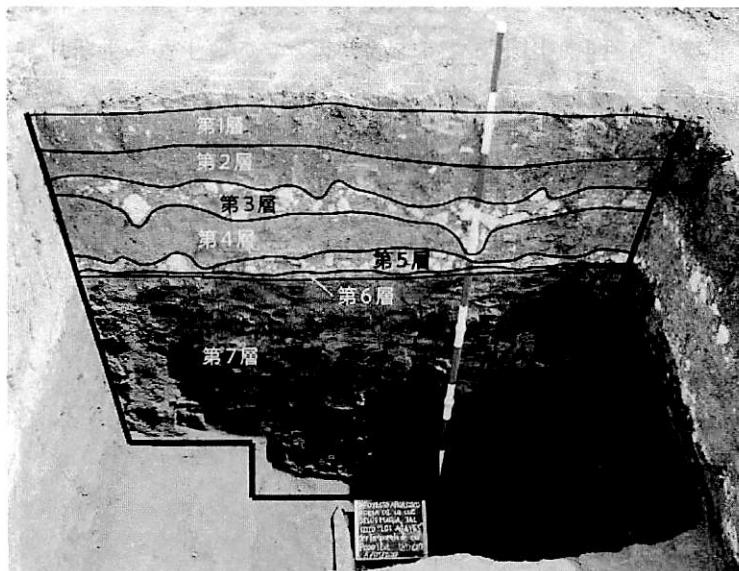


写真 8 広場外部試掘坑北側(PE-001)(筆者撮影)

中央広場の堆積と中央ピラミッドを挟んだ東側に試掘坑を設けた（図3、写真8）。この地点は建造物群が集中する区画の外側にあたり、中央ピラミッドから約5m離れており、現在ではアガベ畑の端に位置している。この区画を調査した目的は、中央広場内部の堆積状況と外部を比較することにあった。2×2mの試掘坑を設定したが、中央広場で設定されたグリッドに合わせることが困難であったため、広場で設定されたグリッドと方位（座標軸）のみを合わせた。

それぞれの土層の特徴をここでは簡潔に述べておきたい。第1層はアガベ栽培による有機物の堆積層で、表面はほぼ水平になっているが、第2層との接触面はやや東に傾斜している。西に位置するピラミッドからの崩落によって形成された堆積が広がっているためと思われる。第2層は、ややしまった明褐色の土壤で、20cm程の厚みがある堆積で、遺物は少ないが出土している。第3層は手のこぶし大の石を含む土層で、西から東へ傾斜して堆積している様子が確認された。第3層と第4層の接触面は一部凹んでいたり、水平な堆積状況になっていない。また石と石の間からは土器が多数出土している。さらに第4層は第2層よりも明るい褐色を呈した土壤であり、土器片も多数出土した。やや硬くしまった土壤であり、第3層と第5層の石を含む土壤に挟まれている。さらに第5層には、第3層と類似する石を多く含んだ土壤が堆積していた。さらに第6層はややしまった灰褐色の薄い土壤で、5-10cmほど水平に堆積していた。第6層の直上からは土器の水平堆積が確認された。第7層は赤褐色の地山と思われる土が1メートル以上も堆積しており、遺物は全く出土しなかった。

これらの層位から遺跡の辿った経緯を復元すると、第6層が床面として機能していた時に、建造物群が利用されており、その後白いカンテラが混じる第5層が堆積する。第5層上面は不均一に堆積しているので、遺跡の放棄後に、ピラミッドを構成していたカンテラが何らかの理由で、散在し堆積したと思われる。その際、カンテラは粉碎された状態になっている。その後、第4層が東に傾斜して堆積し、東側よりも西側のほうが厚く堆積している状況から、中央ピラミッドの中込めの土がピラミッドの崩壊とともに外部に流出し、堆積したのであろう。さらに第3層では、第5層よりも大きなこぶし大の白い石が混じり、ピラミッドが何らかの理由で破壊され、建築資材として利用されていたカンテラが第4層の斜面を伝って崩れ落ちてきて、不均一に拡散したことがうかがえる。その後は、有機物の堆積土壤として第2層、第1層が形成され、現在に至っている。このように考えると、中央ピラミッドは、すくなくからず機能を停止して間もなく、カンテラがピラミッド周辺の地表面に散在す

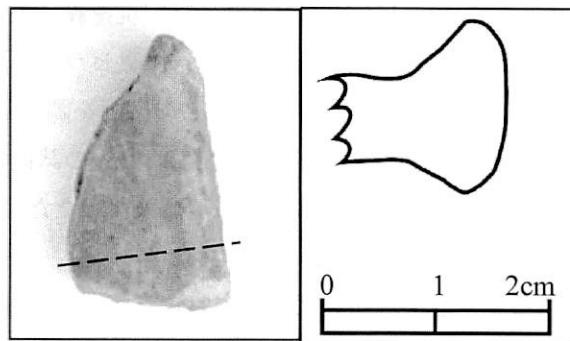


図7 エンガルゴラード型口縁の土器片
(PE-001 出土、17CA-PE-4、
左:写真、右:断面図)

る状況が生じ、その後、内部の土壤もしくは目地土などが流出、堆積し、再度大規模な崩落もしくは盜掘による破壊活動を受けたと考えてよいだろう。

この試掘坑の出土遺物にはエンガルゴラード (engargolado)⁴³と呼ばれる口縁部を持つ土器が含まれていた(図7)。約40cm～60cmの位置から出土しており、遺跡が放棄されて堆積した層から検出されている。遺跡を再利用した痕跡などが試掘坑からは確認でないため、遺跡が機能していた時期の土器と考えてよいだろう。口縁部に特徴のあるこの土器は、メキシコ西部では古典期後期(もしくはEpiclásico:紀元後650-1000年)に属することで、すでに知られている⁴⁴。このことから考えても、ロス・アガベス遺跡の中央ピラミッドは後古典期後期に機能していた可能性が高いと考えられる。

4. ロス・アガベス遺跡の建築プランと文化伝統に関する考察

先行研究で述べたとおり、ロス・アガベス遺跡の位置するヘスス・マリア村のトラテリ博物館には中空土偶が所蔵されていたが、これはサカテカス様式の中空土偶の特徴である角状のラッパ型突起が頭部に認められた。しかしながら、サカテカス州の典型的なスタイルとは異なっており、むしろアテマハック盆地やテウチトラン近郊で見られるコーヒー豆状の目を有しており、双方の文化伝統が見られるローカルなタイプとなっている。また、ベルが調査を行っているように、堅坑墓はロス・アルトス地方北部で確認されている。このことから考えると、ロス・アガベス遺跡周辺にも堅坑墓が分布している可能性は高いと思われ、同地域は堅坑墓が分布する北東端に位置するかもしれない。堅坑墓の時代、少なからず、テ

ウチトラン伝統の影響を受けていたことは、間違いないと言えるが、ロス・アガベス遺跡と建築プランの類似する建造物が見られるペラルタ遺跡やカニヤダ・デ・ラ・ビルヘン遺跡では、円形の建造物も確認されている⁴⁵。しかしながら、ロス・アガベス遺跡には、建造物として円形構造物は確認されていない。

また、ルス湖周辺の川沿いに分布する多数の岩絵の中で特に重要な刻点十字紋は、中央高原のテオティワカンとの関連を示しており、テオティワカンからロス・アルトス地方を経由し、さらに北のサカテカス州のアルタビスタ遺跡を結ぶルートを構成することが確認されている。発見された刻点十字紋は点数からも、同地域が何らかの重要性をもっており、多くの岩絵が作成されていることは想像に難くないが、周囲に建造物が少ないとことから、建築の際の基準点として刻点十字紋が使用された可能性は低いとみてよいだろう。一方、同地域が農耕を行う際に、降雨量にかなり左右される土地柄、またメキシコでも有数の河川であるレルマ川の源流の一つとなっていることから、雨季の時期を知るため、雨乞いなどの儀礼をおこなう際に、岩絵を作成した可能性が高い。つまり、刻点十字紋が農耕を開始する時期などを知るために彫られたものであるとすれば、それは狩猟採集民にとってよりも農耕民にとって、より必要不可欠なものとなる。ロス・アガベス遺跡一帯に農耕民がやってきた可能性、もしくは農耕化が一時期から進んだことを示すものかもしれない。研究史でも述べたように、農耕民と狩猟採集民のせめぎ合いの歴史を示すものとして岩絵群を見てともできよう。時期的には刻点十字紋に限って言えば、古典期前期に関連するものとも考えられるが、アルタビスタ遺跡との関連を探ると、先古典期後期以前に遡ることもできよう⁴⁶。先にも述べたが、刻点十字紋以外の紋様も多数あるが、時期の特定は困難である。

定住農耕民により建設されたと思われるロス・アガベス遺跡は、測量調査によるデータから方形の広場と、それを取り囲む方形基壇で構成されていることが確認できた。さらに中央広場からは、発掘によって中央に祭壇が確認された。祭壇の壁は一面のみ検出されたが、中央ピラミッドの基底部に平行する直線と思われたため、今後の調査で方形の祭壇が姿を現すことはほぼ間違いない。この形態はバヒオ伝統の建造物のレイアウトパターンの中でも、方形広場を中心にして、その二辺を基壇とピラミッドが構成する形態と考えられる。この例は、ペラルタ遺跡の第2複合の二重神殿（ダブル・テンプル）に見られる（図8）。この広場はまさに方形の祭壇を広場中央に有しており、ほぼロス・アガベス遺跡とその形態が一致する。実際には、ロス・アガベス遺跡はさらにもう一つ広場などが付随するので、この亜型とみてよいだろう。

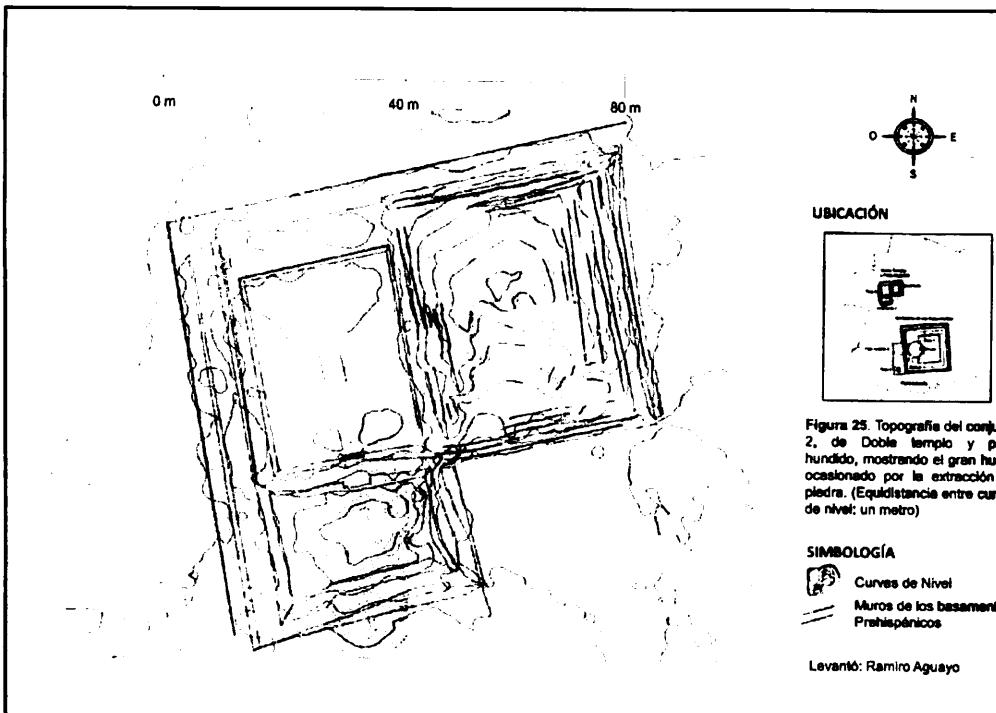


図8 ペラルタ遺跡のダブル神殿の平面図 (Cárdenas2015.Fig.25)

この建築複合の炭素年代測定の結果は、紀元後 610 年 (Cárdenas 2015, p.27) を示しており、7 世紀初頭から利用されている。また、ペラルタ遺跡群を構成するクルシタ遺跡 (La Crucita) も同様の二重神殿の建築プランで建造物が配されている⁴⁷。このようにロス・アガベス遺跡の建築プランとペラルタ遺跡のそれを比較検討すると、ロス・アガベス遺跡は 7 世紀前半から機能していたことがうかがえる。

一方、ロス・アガベス遺跡の中央ピラミッドの東側の試掘坑から得られたエンガルゴラード型の口縁をもつ土器片は、サユラ盆地の土器と比較すると 550 年から 1100 年という年代があてられた。このため、建築プランからは 7 世紀初頭と推測されるが、土器からは 6 世紀中ごろまで遡る可能性が考えられる。いずれにせよ、古典期後期に入るころには、遺跡は建設され機能していたであろう。まだ、ロス・アガベス遺跡が機能していた期間がどの程度であったのかを示すデータは、発掘によって得られていないため、今後の調査で明らかにしていかなければならないが、機能を停止するとすぐに恐らく破壊行為によって中央ピラミッドが崩壊する様子がピラミッド東側の試掘坑から確認できた。床面上に自然堆積は確認されず、建築資材のカンテラが粉碎された状態で出土していることから、それは明らかである。さらに中込の土が崩れ、堆積し、さらにまたカンテラが堆積している。さらなる破壊行為が遺跡に及ん

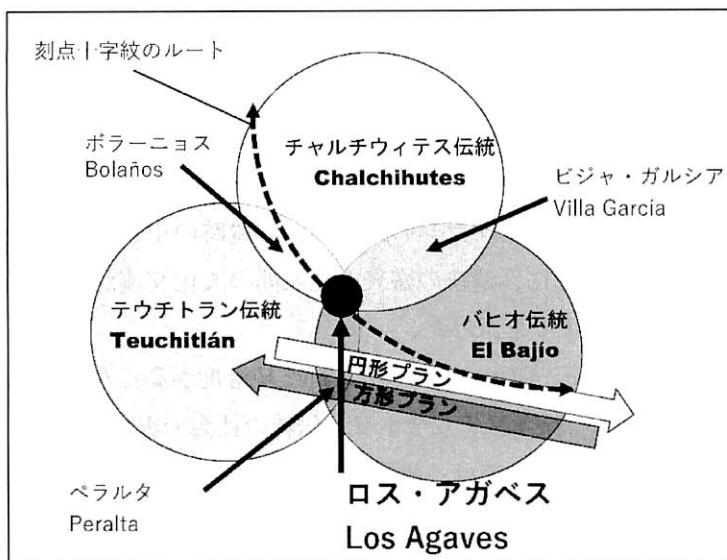


図9 地域間交流の概念図 (Cárdenas, 1999, Lámina 1 改編)

だものと思われるが、その原因が何であったのかは、今のところ明らかにできていない。これは、今後の課題としたい。

考察の最後にロス・アガベス遺跡の置かれた文化的位置づけを確認しておきたい(図9)。ロス・アガベス遺跡は、テウチトラン伝統の影響を受けた円形ピラミッドを有するペラルタ遺跡やカニヤダ・デ・ラ・ビルヘン遺跡などバヒオ伝統が見られる遺跡の北側に位置し、ヘスス・マリア村の展示遺物からも先古典期から古典期前期にかけて特徴的な堅坑墓出土の土偶も確認できた。いわゆるテウチトラン伝統とバヒオ伝統の交錯する地域に位置していることがうかがえる。

また、刻点十字紋からは古典期前期テオティワカンの繁栄する時期に中央高原との関連、もしくは北のアルタビスタ遺跡などとの関係がうかがえる。また刻点十字紋が分布するルートとの関係から交易網上に立地していたことも想定できる。刻点十字紋の分布が交易網と関連するか否かの議論は、紙幅の都合から別稿にゆずることとするが、刻点十字紋の分布するライン上に人々の往来があったことは容易に想像できよう。この点からは、ロス・アガベス遺跡の位置するロス・アルトス地方はバヒオ伝統の中心地であるグアナファト州、さらに東の中央高原とのつながりも示す重要な位置にあり、北部のチャルチウイテス (Chalchihutes) 伝統⁴⁸やテオティワカンの影響がみられる地域と考えてよいだろう。この地域に位置するロス・アガベス遺跡の発掘は、地域間交流の解釈に有用な一次資料を提供してくれると期待できよう。

5.おわりに

学術的な発掘調査がほとんどなされていないハリスコ州のロス・アルトス地方で、その社会・文化発展は、実証的に解明されておらず、本稿ではロス・アガベス遺跡の簡易測量のデータに基づき建築プランの比較と、同遺跡の中央広場と中央ピラミッド東側の発掘データをもとに、遺跡の盛衰と地域間の文化交流がどのようなものであったのかを明らかにしようと試みた。

ロス・アガベス遺跡は紀元前後までは、それほど統合度が高くない狩猟採取民による社会が営まれていたが、徐々にテウチトラン伝統の社会の影響を受け、堅坑墓なども造られるようになった。堅坑墓は一般的に地位の高い人物が埋葬されているので、社会の階層化が徐々に進展していったことをうかがわせる。これは堅坑墓出土と思われるラッパ状の角を持つ土偶からの推測であり、信憑性に欠けるかもしれないが、近郊の遺跡の建築プランからはテウチトラン伝統の影響がこの地域に及んでいたこと明らかである。

また同時に古典期前期には、テオティワカンとアルタビスタ遺跡を結んだライン上に刻点十字紋が各地で描かれるようになる。その際、ロス・アガベス遺跡周辺は、何らかの理由で当時の人々の関心を集めており、多くの岩絵が作成されたのだろう。もちろんすべての岩絵が、古典期前期に描かれたと断定できるものではなく、先古典期から徐々に作成してきたものと想定される。しかし、今のところ、他の時期との明確なつながりを考古学的な資料から読み取ることができないため、岩絵は古典期前期との関連が際立っているように思える。テオティワカンの文化的な指標と考えられてきたタルー・タブレロ様式⁴⁹の建築は、アテマハック盆地のイシュテペテ（Ixtepete）遺跡でもみられるため、テオティワカンの影響のもと刻点十字紋が描かれたと考察することもできるが、その判断は今後のさらなるデータ検証を待つことにしたい。ただ、刻点十字紋が農耕の開始時期を知るために機能していたと仮定すると古典期前期からこの地域でも農耕が徐々に開始されていたと考えることもできよう。

チャパラ湖以西のテウチトラン伝統が衰退する紀元後6世紀末から7世紀に、また、テオティワカン遺跡が衰退するこの時期に、バヒオ伝統をもつグアナファト州を中心とした社会が、ロス・アルトス地方南部に位置する特にロス・アガベス遺跡に影響を及ぼし始める。中央ピラミッド東側の試掘坑から出土した土器の特徴からも分かるように、この頃にはロス・アガベス遺跡が機能し始めたと考えてよいだろう。ロ

ス・アガベスを建設した人々は、定住農耕民であり、神殿建設などに労働力を投下できるさらに統合度の高い社会を実現させたのだろう。おそらく古典期前期の農耕開始により、徐々に社会の進展が見られ、古典期後期に入りバヒオ伝統の影響でロス・アガベス遺跡が建設されたと考えるのが妥当である。

しかしその繁栄も後古典期にはいると、突然終末を迎える。これはエスピルサとロドリゲスが従来の先行研究から想定していたが、ロス・アガベス遺跡の発掘データもこれを裏付けるものとなった。ロス・アガベス遺跡の中央ピラミッドに限って言えば、遺跡放棄後にすぐに、人為的か否かは別として建造物の崩壊が確認された。さらにその後もピラミッドの大規模な崩壊が起きている。遺跡の突然の崩壊の理由として、エスピルサらは気候の変動を挙げていたが、北方からの狩猟採集民の侵入によるものという可能性も捨てきれない。また気候変動に端を発した社会的混乱など複合的な要因も考えられよう。

上述のようにロス・アルトス地方におけるロス・アガベス遺跡の盛衰を建築プランと発掘調査から究明してきたが、チャパラ湖以西や中央高原などの文化と関わって、相互に影響を与えながら該当社会がいかに発展してきたのか、本稿ではその概要を示すことができた。ロス・アガベス遺跡の発掘は2017年度が初年度であり、調査は端緒に着いたばかりであり、2018年2月から3月にかけても、ピラミッド頂上部と祭壇を繋ぐトレーナーを設定して発掘を行う予定であり、さらにロス・アルトス地方の詳細な社会・文化発展の様相を究明していきたいと考えている。まずは、古典期後期にロス・アガベス遺跡で突然の崩壊が起ったことを学術調査による発掘から実証的に確認できたことは、今期調査の重要な成果であった。また、ここで示したロス・アルトス地方の学術調査は、地域相互の関係を明らかにするだけではなく、メソアメリカ文明の周縁部で何が起きていたのか、またメソアメリカ化がいかにして起こるのかなど文明研究にとって重要なテーマの一次資料を提供してくれることとなるだろう。

※本稿は、科研費助成（課題番号 26300034）ならびに2017年度東海大学総合研究機構プロジェクト（課題番号 PJ2017-002）をうけて実施された調査・研究成果を含むものである。

謝辞

ロス・アガベス遺跡の研究・調査に共同団長としてご尽力いただいているミチョア

カン大学のロドリゴ・エスパルサ氏、さらに調査団員でルス湖周辺の岩絵に関する踏査に従事しているフランシスコ・ロドリゲス氏、またマリオ・レティス氏には、多大な協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。また、ロス・アガベス遺跡の位置するカピジャ・デ・ラ・ルス村の作業員の方々をはじめ、調査にご協力をいただいた学内外の関係各位に記して御礼を申し上げる。

参考文献

- Aveni, Anthony F., H. Hartung and B. Buckingham
1978 “The Pecked Cross Symbol in Ancient Mesoamerica”, *Science*, 202:267.
1983 *Skywatchers of Ancient Mexico*, Texas Pan American Series, University of Texas Press, Texas.
- Beekman, Christopher S.
1995 “The El Grillo Complex of Central Jalisco: Teotihuacan Expansion or Epiclassic Movements from the Northern Frontier?”, Paper presented at the annual meeting of the Society for American Archaeology, Minneapolis: (https://www.researchgate.net/publication/237772966_The_El_Grillo_Complex_of_Central_Jalisco_Teotihuacan_Expansion_or_Epiclassic_Movements_from_the_Northern_Frontier_by) .
- Bell, Betty
1974 “Excavations at El Cerro Encantado, Jalisco”, in *The archaeology of West Mexico*, edited by Betty Bell, pp.147-167. Sociedad de Estudios Avanzados del Occidente de México, A.C..
- Blas Castellón
1993 Cerámica de la región Atotonilco-Arandas, Altos de Jalisco. Arqueología, segunda época: 9-10:49-59.
- Butterwick, Kristi
2005 *Heritage of Power: Ancient Sculpture from West Mexico*. The Metropolitan Museum of Art, New York.
- Cárdenas García, Efraín
1999 *El Bajío en el Clásico*. El Colegio de Michoacán.
2015 *Peralta y la tradición Bajío, arqueología, arquitectura y análisis especiales*. El Colegio de Michoacán.

Esparza López, Rodrigo y Francisco Manuel Rodríguez Mota

2013 *Proyecto Arqueológico Presa de la Luz. Temporada II. Informe Técnico.* El Colegio de Michoacán, A.C..

2015 *Proyecto Arqueológico Presa de la Luz. Temporada III. Informe Técnico.* El Colegio de Michoacán, A.C..

2016 *El santuario rupestre de los Altos de Jalisco,* Editorial Pandra.

Esparza López Rodrigo, Francisco Rodríguez Mota, Ignacio Macías y Mario Rétiz.

2012 Proyecto Arqueológico Presa de la Luz. Temporada I. Informe técnico. El Colegio de Michoacán, A.C..

Flores Olague, Jesús, Mercedes de Vega, Sandra Kuntz Ficker y Laura del Alizal

1996 *Breve historia de Zacatecas,* Serie de Breves Historia de los Estados de la República Mexicana. Fondo de Cultura y Económica.

Hers. Marie-Areti y Daniel Flores

2013 Bajo el signo del astro solar: migración, astronomía y arte rupestre en la Sierra Madre Occidental, México, *Revista Digital Universitaria*, Vol.14 Núm.6.

Mata-Ratkovich, Franca

2011 "Producción de la cerámica diagnóstica de grupos de alto estatus. en tres sitios del norte de la cuenca de Sayula, Jalisco". *Trace.* no.59. pp. 40-58. FAMSI.

Meighan and Nicholson

1970 "The ceramic mortuary offerings of prehistoric West Mexico: an archaeological perspective". In *Sculpture in Ancient West Mexico;* Nayarit, Jalisco, Colima, p.17-32, Los Angeles.

Piña Chan, R and Taylor

1976 "Cortas excavaciones en El Cuarenta, Jalisco", *Boletín de la Dirección de Monumentos Prehispánicos.* México, Instituto Nacional de Antropología e Historia, 1:1-14.

Porcayo Michelini, Antonio

2002 *Testimonio de una colonización efímera. Historia prechichimeca de Lagos de Moreno. Jalisco.* CONACULTA - INAH, Archivo Histórico Municipal, Lagos de Moreno, México.

Sánchez Correa, Sergio y Carolyn Baus de Czitrom

1980 Intento de correlacionar etnohistoria y arqueología en los Altos de Jalisco: trabajos

- preliminares. En XVI Mesa Redonda de la Sociedad Mexicana de Antropología. *Rutas de intercambio en Mesoamérica y el Norte de México.* pp. 203-210. México. SMA.
- Schöndube B., Otto,
1994 "El Occidente en Número", *Arqueología Mexicana*, II (9): 58.
- Weigand, Phil y Acelia García de Weigand
1999 "Arqueología de los altos de Jalisco el peñón de Chiquihuitillo y su contexto regional", en *Arqueología y etnohistoria. la región del Lerma*. Eduardo Williams y Phil C. Weigand, (eds.) Colegio de Michoacán, pp. 269-285, CIMAT. México.
- Weigand, Phil
1985 "Evidence for Complex Societies during the Western Mesoamerican Classic Period". In *The Archaeology of West and Northwest Mesoamerica*, edited by Michael S. Foster and Phil C. Weigand, pp.47-91. Westview Press.
- 1993 *Evolución de una civilización prehispánica: Arqueología de Jalisco, Nayarit. y Zacatecas*. El Colegio de Michoacán, Zamora.
- 1996 "La evolución y ocaso de un núcleo de civilización: La Tradición Teuchitlán y la arqueología de Jalisco". In *Las Cuencas del Occidente de México*, editado por Williams y Weigand, pp.185-245. El Colegio de Michoacán, Zamora.
- Williams, Glyn
1974 "External Influence and the Upper Rio Verde Drainage Basin. at Los Altos, West Mexico", in *Mesoamerican Archaeology: New Approaches*, edited by Norman Hammond, pp.21-50, London.
- Wright Carr, David Charles
2005 "Precisiones sobre el término 'otomí'", *Arqueología Mexicana*. XIII (73): 19.
- Yoshida, Teruaki
2016 "Prefacio", en *El santuario rupestre de los Altos de Jalisco*, por Esparza y Rodríguez, pp. I-IV, Editorial Pandra.
- 吉田晃章
2009 「先スペイン期メソアメリカにおけるイヌの象徴性—中米の世界観に関する一試論—」、『文明研究』27号、pp. 1-26。
- 2016 「メキシコ西部における埋葬と世界軸—墳坑墓の象徴性に関する一考察—」、『文明研究』35号、pp. 47-72。

【参照 WEB サイト】

・ INAH

Zona Arqueológica Altavista o Chalchihuites

<<http://inah.gob.mx/es/zonas/111-zona-arqueologica-altavista-o-chalchihuites>>

(2016/1/20 更新、2018/1/20 閲覧)

Museo de sitio de Alta Vista Chalchihuites

<<http://www.inah.gob.mx/es/red-de-museos/233-museo-de-sitio-de-alta-vista-chalchihuites>>

(2016/1/20 更新、2018/1/20 閲覧)

¹ 現地では、Cerritos de Los Agaves または Cerro de Los Agaves などと呼ばれる場合もある。

² メキシコでは一般的に “petrograbado”と呼ばれるもので、顔料や染料を用いた岩陰に描かれる岩絵ではなく、現地の母岩である玄武岩の表面に掘られた岩面彫刻または岩石線画が主である。

³ Weigand によるとタラ(Tala)村、San Juan de los Arcos に、22m におよぶ堅坑墓が存在すると報告されている(Weigand 1996, p.16)。また、堅坑墓の世界観については、拙稿参照(吉田 2009、2016)。堅坑墓の分布に関する記述も、前掲拙稿を参照にした。

⁴ ミーガン(Clement W. Meighan)とニコルソン(Henry B. Nicholson)は堅坑墓が弓形に分布する地域を「古代メキシコ西部の墓のアーチ (The “tomb arc” of West Mexico)」と名づけている(Meighan and Nicholson 1970, p. 22)。

⁵ ウェイガン(Phil C. Weigand)によって提唱された伝統である (Weigand 1985, 1996)。

⁶ エル・アレナル遺跡やサンタ・キテリア(Santa Quiteria)遺跡、ウィツィラパ遺跡などは4つの建造物が中央の建造物を囲み、サンタ・マリア旧アシエンダ(Ex-hacienda Santa Maria)遺跡などは8つの建造物が取り囲んでいる。

⁷ Weigand 1985.

⁸ テウチトラン伝統は、堅坑墓の分布範囲をおよそ包含している。ウェイガンはテウチトラン伝統の遺跡としてグアチモントン遺跡の他に、メキシコ西部地域のウィツィラパのセロ・デ・ナバハス遺跡 (Cerro de las Navajas)、コルタセナ (Cortacena) のシルクロ・デ・ロマ・アルタ遺跡 (Circulo de Loma Alta)、エル・アレナル市のサンタ・キテリア (Santa Quiteria) のコンプレッホ・ランチョ・ヌエボ複合遺跡 (Complejo Rancho Nuevo)、メサ・アルタ(Masa Alta)、タラ市のサンタ・マリア・デ・ラス・ナバハス (Santa Maria de las Navajas) などを挙げている (Weigand 1996)。

⁹ Flores et. al. 1996, Mapa 14. エスパルサとロドリゲスは、テクヘ人やカサカン人は狩猟採集民のチメカ族であると述べている (Esparza y Rodriguez 2016, p.31)。

¹⁰ Schöndube 1994, p.58.

¹¹ アルテニヤ文化という術語は学術的なものとして認められていないが、ロス・アルトス・デ・ハリスコ地方における考古学的調査のため便宜的に利用されている。なぜなら、一定の物質文化を共有しているからである。

¹² Porcayo 2002.

¹³ Weigand y García 1999.

-
- ¹⁴ Bell 1974, p.155.
- ¹⁵ メトロポリタン美術館の遺物については、紀元後 200 年という年代が与えられている (Butterwick 2005, p.56.)。
- ¹⁶ Castellón 1993.
- ¹⁷ Bell 1974, pp.147-167.
- ¹⁸ Williams 1974.
- ¹⁹ Piña Chan y Taylor 1976.
- ²⁰ Sánchez y Baus de Czitrom, 1980, p.282.
- ²¹ エスパルサとロドリゲスは、テオティワカン遺跡の崩壊の 2 世紀前の 400 年から定住がはじまるとして述べている (Esparza y Rodriguez 2016, p.33.)。
- ²² Esparza y Rodríguez 2016, p.33.
- ²³ Esparza y Rodríguez 2016, p.33.
- ²⁴ Teocaltitlán で INAH(Marisol Montejano Esquivias)が調査を行っている程度である。
- ²⁵ INEGI(Instituto Nacional de Estadística y Geografía)による。
- ²⁶ これらの成果は書籍 *El Santuario Rupestre*(Esparza y Rodriguez 2016)として 2016 年に出版された。この際に、同年 9 月東海大学文学部とミショアカン大学との学術協定の締結を記念して、筆者が緒言を書いた (Yoshida 2016)。
- ²⁷ Aveni et al. 1978 など。
- ²⁸ Hers y Flores 2013.
- ²⁹ Aveni 1983, pp.228-229.
- ³⁰ 岩絵群は川沿いに分布しており、川から離れるとその数は減少する。
- ³¹ Esparza y Rodriguez 2013, 2015. Esparza, Rodríguez Macías y Rétiz 2012.
- ³² 発掘については、4 月に INAH の許可が下り、2017 年 5 月 3 日から 8 日と短い期間に実施された。
- ³³ 残念ながら、写真による処理のため植生も自動的にデータ処理に含まれ、図でも確認できるように、畑に植えられているサボテンや樹木まで、等高線を結んでしまっているので、地形図としてみる場合には注意が必要である。
- ³⁴ Weigand 1985, 1996.
- ³⁵ Weigand 1993.
- ³⁶ Cárdenas 2015, p.24.
- ³⁷ Beekman 1995.
- ³⁸ エフラインによれば、カニヤダ・デ・ラ・ビルヘン遺跡の年代測定は 1017-1152 年という後古典期の年代を示している (Cárdenas 2015, p.28)。
- ³⁹ 遺跡に基準点を設け座標の中心とした。その基準点から基本四方位に座標軸を伸ばし、2m 間隔で区画し、グリッドを設定した。例えば S9W6 であれば、座標中央から南に 16-18m、西に 10-12m に位置する 2×2m の正方形を指すことになる。S9W5-S9W7 は図 3 中、「中央広場」記された右下の矢印がその位置を示している。
- ⁴⁰ カンテラとはメキシコでは、石灰岩系の変成岩または堆積岩を指し、ピンクや薄緑色を呈するものがある。現在もメキシコ各地で建材や装飾材として利用されている。
- ⁴¹ 現在のところ、約 10 km 離れた丘にカンテラの採石場があることが確認されているが、良質のものはさらに多くから運ばれてきている可能性がある。なぜなら、ロス・アガベス遺跡の近傍のカピジャ・デ・ラ・ルス村の礼拝堂もカンテラで造られているが、さらに離れたカンテラの採掘で有名なサン・ミゲル・デル・アルト (San Miguel el Alto) から建材を搬入しているからである。
- ⁴² S9W6 のグリッドからは 17CA-PP-C-2 の 1 点、S9W5 からは 17CA-PP-C-4, 17CA-

PP-C-5 の 2 点を採集した。

⁴³ 有頸壺の口縁がほぼ水平に外反し、口縁先端部が上下に肥厚するタイプの土器である。

⁴⁴ ハリスコ州の中央部に位置するサユラ盆地では、サユラ相（紀元後 550-1100 年）において、エンガルゴラード型口縁部が出土している (Mata-Ratkovich 2011)。

⁴⁵ ペラルタ遺跡の 1 号コンプレックスの円形構造物 (Cárdenas 2015, p.95) とカニヤダ・デ・ラ・ビルヘン遺跡の建造物 10b (Cárdenas 2015, p59) が円形建造物であり、チャパラ湖以西のテウチトラン伝統がみられる。

⁴⁶ INAH のホームページ Zona Arqueológica Altavista o Chalchihuites によれば、チャルチウイテス文化は 200 年から 1000 年まで栄え、先古典期にその起源をもつ (URL: <http://inah.gob.mx/es/zonas/111-zona-arqueologica-altavista-o-chalchihuites>、2018 年 1 月 15 日更新)。Museo de sitio de Alta Vista Chalchihuites には、アルタビスタの最盛期は 5 世紀終盤から 875 年で、以後衰退し 1400/1450 年までには放棄されると考えられている。(URL:<http://www.inah.gob.mx/red-de-museos/233-museo-de-sitio-de-alta-vista-chalchihuites>、2016 年 1 月 20 日更新)。

⁴⁷ Cárdenas 2015, pp.118-119.

⁴⁸ チャルチウイテス伝統の建築で有名なのは、アルタビスタ遺跡とラ・ケマダ (La Quemada) 遺跡であるが、バヒオ伝統に似た方形広場を持つが、広場に付随する方形基壇は低く、部屋上構造物内に多数の円柱が配されている列柱の間が存在する。

⁴⁹ タルー・タブレロ様式とは、傾斜する基壇の壁面の上に、地面に水平な石板をはめこみ突部を作り、傾斜する基壇を積み重ねいく建築様式である。